

子育てにとって「地域子育て支援センター」は何ができるのか
—子育ての魅力に気付くための「地域福祉」再構成のための試み—

松永愛子

(日本女子大学家政学研究科児童学専攻)

研究目的

我が国の少子化対策は、労働力確保のために行われており、未婚者を対象に、働きながら将来の労働力である子どもを生むことを求めるものである。だがその方向性は子どもを生む世代（少子化世代）の生き方の選択の幅を狭めているといえるのではないだろうか。

一方、少子化世代自身は、働くことと子育ての両方を「人生のメリットを合理的に増やすため」の選択肢拡大ととらえ、国の少子化対策の方向性に疑問を感じずにいる。また同じ理由から、子育てのコスト感を払拭できないという理由で、子どもを持つ選択を遠ざけるのである。

わが国の政策は、少子化を式で表した経済学者 G. Becker の考えに近い、「機会費用」「現金費用」削減の方向性を打ち出している。しかし子育てのコスト感は完全に払拭できていない。それは、子育てという仕事が貨幣に換算できない合理的でない部分、親子の関係性の仕事としての性格を強くもつ仕事だからではないか。

そこで、合理的に数量化できず、市場サービスで買うことができず、人との関係性に負う仕事のあり方を「労力」ととらえた。現代において「労力」と呼ばれている部分は、昔は近隣関係や親族関係など人間関係の中で負担感を解消でき、人と人をつなぎ喜びに変える性格もっていた。「労力」は貨幣価値に還元できないからこそ、現代においても、人と人をつなぐ可能性を持つのではないかと考えた。そしてエンゼルプランの中にある項目の一つ、地域子育て支援センター事業に注目した。

子育ての仕事の「労力」の部分を通じて、人と人との出会いがあり、喜びを感じる場としての地域子育て支援センターを作ることが、「労力」をメリット感に変えることにつながらないだろうか。

本研究では、地域子育て支援センターが子育ての楽しみを感じる場所となり得ているか、またその活動が少子化世代にとって、生き方の選択肢を増やすことになり得るかという可能性をさぐりたい。

方法 「F市子育て支援センター」（以下「支援センター」）におけるフィールドワークと文献研究の両方から研究を行なった。フリースペースでの親子とアドバイザーの動きや会話の筆記記録、事例検討会の録音記録を行なったことを基に分析と考察を行なった。

考察・結論

・F市子育て支援センターの取組み

「支援センター」の独自性の根拠にもなっていると考えられる成立過程を追うと、初期には、「講座」や「相談」といった啓蒙的な活動から始まっている。しかし試行錯誤の末、フリースペースを提供し子育てアドバイザーは極力後景にひくという、親の居場所確保を優先し、親自身が楽しみを見つけていくスタイルを確立したことがわかる。F市子育て支援センターでは以下のような、取り組みが特徴的であった。

(1) 子育て情報のやりとりができること。

「支援センター」においては、情報—他の母親やアドバイザーの子育ての経験談—が交換されていた。保育園情報、子育てサークルの紹介、健康診断の情報、などの刊行物やインターネットで公開され、個人の努力で入手可能な情報に対して、経験談という「子育ての事例」は、支援センターにおいてしか手に入らず公開されていないという意味でより貴重な情報である。

Kさん	ダウン症児の障害を受容し子育てを前向きに行なう家族。アドバイザーにとっての貴重な情報（双方向性）
W	夜にミルクを1リットル飲むことで悩む親。他の親やアドバイザーのアドバイスにより気持ちが軽くなる。
T	子どもの言葉が出ないことで悩む親。同じような子を持ちつつ明るくくらえている母親との交流により気持ちが軽くなった。
K	夜泣きとは何かわからず、アドバイザー二人に助言を求める。それぞれのアドバイスによって納得がいった様子。

(2) 母親であることを確認しあい楽しみあう場。

「支援センター」では、子どもが媒体となり親同士の交流を促し、人と接することが苦手な親にもその場にいる理由を与えていた。そこで親が得ているものは「母親である自分を楽しむ場」であるといえる。

Goffman, E の言うように「自己 [のイメージ] 自体はその所有に由来するものではなく、彼の行為の全局面に由来するものである。自己は、局域内の種種の出来事を目撃者に解釈可能ならしめるこれらの部分的出来事に共通の属性によって、生成されたものなのである」(Goffman, E, 1959, 括弧内著者) とすれば、女性が母親の役割を担うためには、子育て行為をしている自分を目撃する観客がいて初めて女性は母親になり得るのだといえる。

現代は、母子だけが孤立している核家族世帯が多い。孤立状況の中では、母親が“母親らしく”振舞うことを人に見られることを通して、母親である自分を自分で確認していくことの楽しさや意味が失われ、母親としての自分を確立していく機会を失っていると考える

れる。「支援センター」はそのような機会を復活させる場所として機能しているといえる。

A	地元・実家から遠く引っ越してきた母親。0歳児を抱えた親の、上の兄弟の2歳児の男の子を構うことで居場所を作っていく。
U	4箇月児を連れて二人連れで来所。親同士の交流のために、子どもをぬいぐるみのように扱って、ロパクで挨拶をする光景があった。
N	仲良しグループの固まっている中に入りづらい状況の中、他の子どもを媒介にして居場所をつくる様子が見られた。
T	仲良しグループのリーダーのような人である。グループ内で子どもに関する話題で長くもりあがる様子が見られた。

(3) 顕在化させることから受け入れることへ。

「支援センター」での事例検討会には様々な問題を抱えた親子が議題にあがる。例えば精神疾患名が付与される人、疑われる人、母親自身が障害者である場合、障害児などが来所する。

問題を抱えた親子のニーズが顕在化した場合、専門機関に繋ぐ対応が考えられるが、それには、本人が今の生活を変えたいという意志を持たねば繋がらないという限界がある。「支援センター」ではそうせず、まず第一に、そのままの彼らを受け入れ支援していく。「支援センター」は彼らが社会との接点を持ち孤立しないですむこと、彼らの子育てを見守り生活を支援することに価値を置いているのである。

T	養護学級に通った。実母に叱られて育ったため実母に確執がある。夫も常に叱るので立場がない。支援センターで居場所を見つけている。
S	被害妄想の気質をもつ。通院やセルフヘルプグループは本人によると傷つけあうだけに思え続かなかったが支援センターに定期的に通う。

(4) 生活に根づくということ

上記3項目について、「生活に根づく」ということは必要な基盤である。親子の抱えている問題にあった事例を提供すること、親子にあった交流の仕方を援助していくこと、一部分の病理を診断するのではなく生活全部に関わること、これらは生活への視点を無くしては成し得ないことである。

最初は、の生活パターンの中に「支援センター」が根付くという意味の「生活」であったのが、繰り返し来所しアドバイザーとの関係が深まることによって、夫婦関係、祖父母との関係、母親の歩んできた人生などが見えることがある。「生活に根づく」という意味は「人生に根づく」に近い意味をもつようになり、よりの確で深い支援をすることに繋がっていくのである。

・「地域福祉」の枠組みの限界

「支援センター」の取り組みを「地域福祉」の枠組みで捉えることはできないのではないだろうか。なぜなら、「地域福祉」は牧里が「機能論的資源主義アプローチ」(牧里, 1986)と呼ぶように、効率を優先し、サービス供給側の視点中心となる実情があるからである。

今まで「支援センター」は「地域福祉」の機能的側面を強調する考え方により、「相談数」「情報提供数」「深刻

な病理を抱える親の発見数」「一時預かり数」などで評価されてきた。しかし、生活に根付くこと「人との出会い」「評価されず居場所がある」「親が親であることの楽しみを知る」など数に表せないことに目を向けなければならない。そのために「地域福祉」概念再構成が必要である。

・「地域福祉」に代わる枠組み

「地域福祉」の枠組みから離れるために「祭り」という枠組みを提示する。「祭り」とは鶴見によると、「人びとが生活していくうえで自分たちで自分たちを励ますために作り出した装置」(鶴見, 1988)である。個人、集団全てを対象に、生活全般に役立つという意味で地域福祉が本来目指している要素を持っている。さらに、サービス供給側主体ではなく、自分自身で作り上げるものであるという点で既成の「地域」を克服しているといえる。

「祭り」の要素として、鶴見や鳴海は①準備するプロセスがある②社交がある③交易がある④神の前の平等のような意味で、評価せず受け入れることを挙げている。そして、鶴見はそれに加え、現代においては自然発生しない集団的な「祭り」を⑤誰が行う意志を持つのか、という点が問題点であると述べている。

このことを「支援センター」に即して考えると、子育て情報のやりとりができることは、情報の交易として、問題を顕在化させることから受け入れることは、評価しないということとして、母親であることを確認しあい楽しみあう場合は、社交として、生活に根づくということはプロセスがあることとして、捉えなおすことができるのではないだろうか。また、誰が祭りを行なうか、という問題については、専門性が評価されにくいアドバイザーの仕事の問題ととらえることができる。

まとめ「支援センター」は「労力」を新しい人間関係の構築という面でプラスに変化させる可能性を持つ場である。「支援センター」において、子育ての楽しさを事実として積み重ねていくことが、少子化世代にとってある“気づき”を促すことになる。それは、今まで偏った幸せの選択肢が提示されてきたということである。子どもを持つか持たないか、仕事をしながら子育てするのか、子育てに専業するのか、自分なりの幸せを選択する機会を持つべきである。

子育てのように、貨幣経済とは違う価値観の中にあるものが自分にとって「幸せ」であった場合、望む幸せが与えられ、守られるという機会は現代社会では難しい。だからこそ市場経済の価値観の中では「労力」と呼ばれ無視されがちなものを持ち込んで、人と人との繋がりをつくる喜びを感じる場を作ることが、幸せに続く道のひとつとなりえるのである。